

日本産菌株を用いたアミガサタケ栽培技術の開発

(5) ヒノキ林床での栽培試験

1 はじめに

アミガサタケ(広義)は高級な食用きのこである。子実体の色や形により黒色型と黄色型に大別され、黒色型の数種類は、中国の雲南省等で商業栽培に用いられている。林業技術センターでは、露地(成果速報No.365)に続きパイプハウス(同372)で栽培試験を行い、栽培期間の短縮と増産に成功した。一方、中国では林床栽培も行われるが、日本国内での実施例は無い。そこで今回は、ヒノキ林床で栽培試験を行った。

2 材料と方法

(1) 供試菌株

日本国内で収集した黒色型アミガサタケMel21種*の1菌株を用いた。同株はこれまでの栽培試験で子実体が発生している。

*:中国の栽培種の1種(岩手生物工学研究センター解析)

(2) 試験地

当センター構内のヒノキ林(林齢29年、平均樹高13.4m、平均胸高直径22.4cm、立木密度3000本/ha)の立木間に、幅1m、長さ5m、高さ15cmの畝を立てた(図1)。

(3) 栽培試験

供試菌株を室内で培養して種菌を作成し、2021年5月に畝に散布(接種)した。接種後はマルチシートで被覆し(図1)、無加温で散水、換気等を適宜行った。さらに漁網(目開き5mm)で被覆し、獣害を防いだ。また、畝付近の深さ3cmで地温を測定した。

3 結果

接種約10カ月後の2022年3月に、子実体原基(ピンヘッド)と幼子実体が確認され(図2)、翌月にはその一部が成長した(図3)。発生時期は融雪後でハウスより2か月遅く(図4青矢印)、原基形成は4月中旬まで見られた。また、原基形成開始時の地温は、ハウスと同様の5℃程度と推定された(図4赤矢印)。子実体発生量は露地栽培試験(1個/m²)より多く、3月下旬における子実体個数は25個/m²であった。

4 おわりに

アミガサタケをヒノキ林床で栽培したところ、露地栽培より発生量が多く、かつハウスより遅い時期に発生した。ハウスとの併用により、長期かつ安定的に収穫できる可能性が示された。

[謝辞] 子実体をご提供いただいた皆様と、栽培技術をご指導いただいた雲南省高原特色農業産業研究院桂明英副院長、雲南農業大学馬嘯教授、中国科学院昆明植物研究所趙琪博士、他雲南省各位に感謝します。



図1. 試験地



図2. 子実体原基(赤丸)と幼子実体(黄矢印)



図3. 発生した子実体

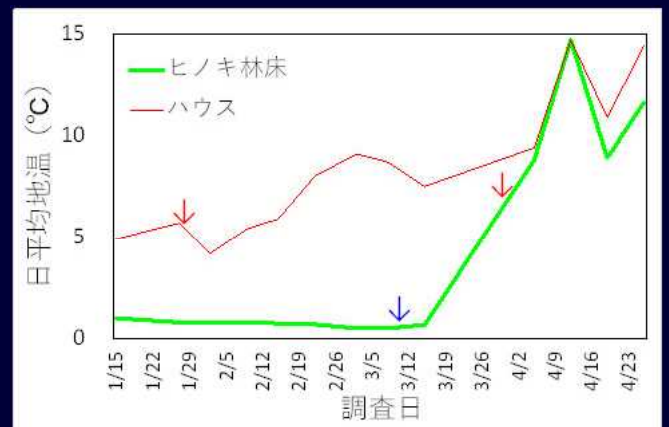


図4. ヒノキ林床とハウスの日平均地温の推移 (赤矢印:原基初認日; 青矢印:融雪確認日)

(上席専門研究員 成松 眞樹)

連絡先

028-3623 岩手県紫波郡矢巾町大字煙山第3地割560番地11
 岩手県林業技術センター
 ホームページアドレス <http://www2.pref.iwate.jp/~hp1017/>

TEL 019-697-1536
 FAX 019-697-1410